

2022年2月20日（日）「神の義と愛の会えるところ」

ガラテヤ 3:10-14

10 律法の行いによる人々は皆、呪いの下にあります。「律法の書に書いてあるすべてのことを守らず、これを行わない者は皆、呪われる」と書いてあるからです。11 律法によっては、誰も神の前で義とされないことは明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。12 しかし律法は、信仰をよりどころにしていません。「律法の掟を行う者は、その掟によって生きる」のです。13 キリストは、私たちのために呪いとなって、私たちを律法の呪いから贖い出してくださいました。「木に掛けられた者は皆、呪われている」と書いてあるからです。14 それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人に及ぶためであり、また、私たちが、約束された霊を信仰によって受けるためでした。

【序論】

讃美歌 262 番は私の愛唱歌の一つですが、歌うたびにキリストの十字架の真理を深く教えてくれます。1 節の歌詞を読んでみましょう。

十字架のもとぞ いとやすけき
神の義と愛の 会えるところ
嵐吹く時の 巖の陰
荒野の中なる わが隠れ家

二行目の「神の義と愛の会えるところ」という表現に注目しましょう。主イエスの十字架において、神の義と愛が出会っているというのです。これはどういう意味なのか。私はこれまで漠然と賛美しながら、その意味を説明できなくてはならないと内心思い続けてきました。今日の聖書箇所は私の課題に答えを与えてくれているように思います。

【本論】

本論 1. 律法の行いによる人々（律法も神の御心）

律法の行いによる人々は皆、呪いの下にあります。「律法の書に書いてあるすべてのことを守らず、これを行わない者は皆、呪われる」と書いてあるからです。（3:10）

ここでまず目に付く言葉は「呪い」ですが、聖書読者にとってあまり心地良い響きを持ってはいないでしょう。「呪い」とは、聖書的には、神に対して罪を犯した者への審きであり、不幸と死を身に招くことです。パウロの論理によりますと、人が罪に定められるのは「基準から外れた状態」にあるときであり、その基準とは「律法」にほかなりません。神が永遠に定めておられる法があり、それに適う生き方をしているかどうかで有罪か無罪かが決定されるのです。この「神の法」は、本来恵みとして与えられたものでした。人間に正しい生き方を示し、「このことばに従って生きていけば幸せになれるよ」と教えてくれるものだったのです。人間は、何の決まり事もなければ無法状態になり、底なし沼のような欲望の虜となっていくでしょう。律法はそのような状態に歯止めをかけ、「正道はここにあるよ」「真理とはこういうものだよ」と教えてくれたのです。

ところが、この本来恵みとして与えられた律法が、神への反逆の拠点になったということです！これは思わぬ錯誤でした。私は二つの意味で錯誤が生じたと考えています。第一に、「ことば」として与えられた律法を、人間はその本質を聞き取ることをせず、字面だけを守るようになったことです。「どこまでなら律法違反にならないか」「法の抜け穴はないか」という、形ばかりの宗教生活を作り上げてしまった。形式上はキレイに整えられているのですが、神を愛し人を愛するという律法本来の目的が損なわれている。このようにして、形骸化した宗教、いわゆる「律法主義」が生まれたのです。このことをもう少し具体的にお話しするならば、金の力によって裁判が曲げられている現実が見過ごされていながら、神への犠牲は怠りなくささげられているということがあった。

主は言われる。あなたがたのいけにえが多くてもそれが私にとって何なのか。私は、雄羊の焼き尽くすいけにえと、肥えた家畜の脂肪に飽きた。私は、雄牛や小羊や雄山羊の血を喜ばない。《中略》また、あなたがたが両手を広げても、私は目をそらしあなたがたが祈りを多く献げても、聞くことはない。あなたがたの手は血にまみれている。(イザヤ 1:11-15)

神にとって、この状況は耐え難いことでした。

律法がもたらした第二の錯誤は、その基準が罪ある人間にとって救いとなり得なかったということです。律法とは聖なる神の御旨であります。その基準に適う人間は一人もなく、無機質に人の罪を暴き、裁きをもたらすだけのものとなってしまったのです。仮に人間に罪がなかったとするならば、そのような結果には至らなかったでしょう。いえ、もし人間に律法に従い抜く能力があったのであれば、そのような錯誤は生じなかったのです。しかし、人間は常に神の御心とは真逆へ向かう性質を有している。それゆえに、律法に従えない人間にとって、律法は呪縛となるのです。

罪は戒めに手がかりを得て私を欺き、戒めによって私を殺した。(ローマ 7:11)

律法とは「神の義」の現れであり、道を踏み外した人間を罪に定めるものとなりました。

本論 2. 信仰によって生きる人々

以上のことから、今や律法は罪人に対して救いを宣言するものではなくなったことが明らかになったでしょう。

律法によっては、誰も神の前で義とされないことは明らかです。(3:11a)

しかし、パウロは尚も希望を残しています。11 節の後半に目を向けましょう。

なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。(3:11b)

ここでパウロは旧約預言書の「ハバクク書」から引用しているのですが、そこでは本来「高慢な者」との対比として「正しき人」が登場しています。

見よ、高慢な者を。その心は正しくない。しかし、正しき人はその信仰によって生きる。

(ハバクク 2:4)

ここでの「高慢な者」とは、ハバクク 2 章の文脈で捉えると、自分の富や能力を誇る人のことを言っていると思われます。これらのもの(身に貼り付ける「いちじくの葉っぱ」)が人間の目を眩まし、自分が神の御前に罪ある存在であることを忘れさせるのです。「正しき人」がそれと反対であるならば、その人は神の御前にへりくだり、自分がその本質において神を喜ばせることができない存在であることを深く認めているということになるでしょう。自分の能力や富によっては神を喜ばせることも御心に従うこともできないのであれば、その人に残された道は一つ、「信仰によって生きる」ことです。このような自分であっても、愛し捨てることをなさない神の恵みに依り頼んで生きることであります。その人の心には、ある種の不安がある。それは、本当にこんな自分が救われているのだろうか、罪は赦されているのだろうかという不安です。絶対に大丈夫だと言えるものがないからです。罪人が依るべきところは神の恵みであって、本来赦され得ない者が無条件に赦されるという約束を信じることであります。

しかし律法は、信仰をよりどころにしません。「律法の掟を行う者は、その掟によって生きる」のです。(3:12)

今日の箇所何度か出てくる類似表現があります。「律法の行いによる人々」(10 節)と「律法の掟を行う者」(12 節)は同じことが言われていると思われませんが、この生き方を選択する人の特徴とは、自分には神の御心に適う生き方ができるという自負を持ち合わせていることです。本来できないことをできると言う。いや、できないことを知らないか、できていないのにできていると思いついでいるかのどちらかでしょう。ハバククの言う「高慢な者」という表現がそっくりそのまま当てはまってまいります。律法を行なうことで義とされようとする道と、信仰によって生きる道とは二者択一であり、人はいずれかを選択しなくてはなりません。

神は御心に従って生きることをできない私たちを憐れみ、罪の泥沼から救い出したいと切望し、罪の赦しの福音を与えてくださいました。神の愛はこのようにして私たちに注がれたのです。律法は聖なる神の御心であります、福音は罪を赦したいという神の御心であります。私たちはここで、神ご自身の中にある激しい葛藤を見落としてはなりません。

本論 3. 呪いとなられたキリスト

キリストは、私たちのために呪いとなって、私たちが律法の呪いから贖い出してくださいました。「木に掛けられた者は皆、呪われている」と書いてあるからです。(3:13)

本節では、主イエスの十字架の意味が見事に表現されています。いえ、「見事」などという表現は使うべきではないかもしれませんが、ここに、神の「痛み」があるのです。主イエスは十字架上で呪われたと書かれています。呪いとは、「神に対して罪を犯した者への審きであり、不幸と死を身に招くこと」とご説明いたしました。つまり、神の子イエスは神に対して罪を犯した者と見なされ、審きを受け、不幸と死を身に招いたのです。もちろん、主がそれに相当する罪を犯したということではありません。罪なき方が誰かの代わりにその立場に身を置かれたのです。「誰か」とは一体誰のことか。それは、神の法に適わぬすべての人間です。あなたであり、私であります。

「木に掛けられた者は皆、呪われている」という聖句は申命記 21:23 からの引用ですが、本来は処刑された人がさらし者として木に吊るされるという「呪いの儀式」でありました。十字架はもっと恐ろしいことに、生きてままで木に打ち付けられ、死ぬまで放置されるというものであり、その意味で旧約の呪いを超えているでしょう。この呪いは、神の怒りの現れであり、罪に対する神の義が貫徹されるためのものです。つまり主イエスは、多くの人の罪を背負っているため、そのおびただしい罪のゆえに神の義にふれたのです。言い換えるならば、主は律法によって裁かれたのです。ここに、罪を放ったらかしにすることができない「神の聖」「神の義」がある。

では、神は何故に御子イエスをこの呪いの十字架へと送られたか。それは、私たち罪人を愛してやまないからではありませんか。私たちが赦し、神の子にしたいという切望のゆえに、身代わりに罪を負わせる存在が必要だったのです。その重責を担えるのは、動物ではありませんでした。誰か他の罪人でもありませんでした。この責務を果たせるのは、ただ一人、罪のない神のひとり子、「世の罪を取り除く神の小羊」でなくてはならなかったのです。

讃美歌 262 番の歌詞に戻ってみましょう。「**神の義と愛の会えるところ**」とは、罪を

処理せずにはおられない神の義と、罪を犯した人間を赦したくてしかたがない神の愛の接点が十字架であることを歌っているのです。ルターの過激な言葉も引用しておきましょう。

- ・ 「律法はキリストを瀆神者として糾弾した。」
- ・ 「神の恵みは律法と格闘した。」

十字架上で神はご自身と戦われたのです。律法と恵みが激しく切り結んでいる。そして、恵みが勝利したのです。それと同時に、律法は主イエスにおいて完全に全うされ、神は満足を得たのです。なぜなら、神を怒らせてきた人間の罪がそこで処理されたからです。

【展開】

最後に 14 節を読んでおきましょう。

それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人に及ぶためであり、また、私たちが、約束された霊を信仰によって受けるためでした。

今日の箇所のとめとなる聖句ですが、パウロは再び「アブラハムに与えられた祝福（救い）」が異邦人に及ぶというテーマに戻ります。アブラハムは信じることによって義とされた。その救いの方法は今も、とこしえに変わることはない。異邦人も彼と同じように信仰によって義とされるのだ。神の御霊がその人の内に宿り、その人は全く神のものとされるのです。

【結論】

今日は、神が私たちのために戦い苦しまれたということを心に留めたいと思います。主イエスに呪いが移されたことにより、私たちに向けられていた律法の呪いは解かれました。これほどまでのことをしてくださる神を信じないでいられましょうか。今や神の愛の下に置かれた存在であるという深い安心感に満たされながら、信仰の道を歩み抜きたいと思います。

【祈り】

律法も主のもの、恵みも主のもの。私たちのために十字架上で苦しまれた、イエス・キリストの父なる神様。神の義と愛が十字架において切り結びました。そして、主イエスにあって私たちの罪は審かれ、神の義は全うされ、神の恵みは私たちを覆いました。この不思議なる真理は聖書でしか知ることができません。これを知ることができた幸い、信じることができた幸いを心に覚えます。私たちが知らなかった方が、私たちのために苦しんでくださったことを今受け止めています。あなたの恵みにいつまでも留まらせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
聖なる律法をもって人の歩むべき道を示し、ご自身の義を現し給う、父なる神の愛、律法の呪いを、罪人に代わって、一身に引き受け給うた、主イエス・キリストの恵み、神の義と愛の出会える十字架の福音を、魂で受け止めさせ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。